

小学生の漢字学習の個別最適化に向けて (1) —定着状況と反復学習の関連—

○平林ルミ (東京大学)

高橋麻衣子 (東京大学)

キーワード: 漢字学習, 個別最適化, 定着

問題と目的

小学校の国語科において漢字学習は大きな割合を占める。漢字を何度も書く反復学習は現在でも漢字学習の主要な方法である。しかし、効果的な反復ができなかったり、反復しても定着しない子どもが存在することは、学習障害の子どもの存在や読み書きの困難がグラデーション状に存在することからも明らかである。本研究では漢字の宿題を反復学習で行ったときの定着状況と長期的な漢字の定着状況を併せて調査し、反復学習に効果のある児童とない児童の割合を明らかにする。

方 法

調査対象者及び手続き

群馬県内の公立小学校に在籍する小学 4 年生 34 名。調査は担任教諭の協力の元、学級単位で朝学習の時間もしくは国語の学習の時間にプリント形式で実施した。

調査内容及び課題

調査① 漢字書取の宿題が習得に与える効果評価を 1 週間を単位に実施した。月曜にプレ、金曜にポストテストを行い、その間に漢字の宿題が子どもたちに出された。漢字学習および宿題の内容は対象クラスの日常的な活動と同一のものとした。本学級においては漢字書取の宿題が出される前に、国語の授業中に教科書の単元に準拠した漢字ドリルを用いてその漢字の読み方・使われる言葉を確認し、なぞり書き 1 回、写し書き 2 回、その漢字が使われた 4 種類の単語を 1 回ずつ写し書きする学習が行われていた。宿題はその対象漢字 (1 日あたり 10 単語) をノート 1 列分 (1 行 15 文字) だけ反復して書くという内容である。本調査の対象漢字は単元の進行状況を担任教諭と相談の上、学校で使用している漢字ドリルの確認テストから 1 ページ分 20 題を選択した。

調査② 長期的な漢字の書取定着状況を評価する課題として (a) 1 学年下で学習された漢字の中で習得度の高い漢字で構成された漢字書取課題を 20 題、漢字の知識を評価する課題として (b) 日常的に目にする身近な漢字の選択課題 20 題、(c) 同音異義語の選択課題 10 題の計 3 課題を行った。

調査時期

①は 2020/2/10-14 の 1 週間、漢字の宿題が出されたのは 2/10, 12, 13 の 3 日間である。②は 2020/2/17 である。

結果と考察

課題①は 1 問 5 点で採点した。各児童の得点を図 1 に示す。クラスの平均得点はプレ 50.0 ($SD=25.6$), ポスト 83.7 ($SD=24.23$) であった。プレポストで上昇した得点の平均は、33.7 ($SD=18.9$) であった。

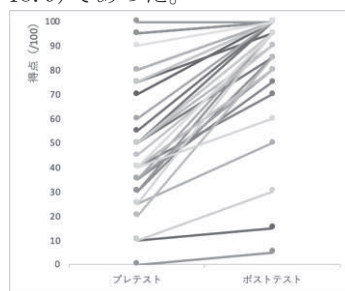


Figure 1 個人ごとのテスト得点

プレテストの時点で漢字習得が十分と考えられる児童 (90 点以上) が 4 名、宿題によって漢字習得が促進された児童が 25 名、プレポストともに著しく低い成績で宿題の効果が見られない児童 (70 点未満) が 5 名存在していた。

Table 1 プレポスト得点別の児童数 (人)

		ポストテスト			小計
		90-	70-85	-70	
プレ テス ト	90-	4	0	0	4
	15-85	17	8	3	28
	-10	0	0	2	2
	小計	21	8	5	34

調査②では課題ごとにクラス平均と標準偏差を産出した。(a)で 1 学年下の漢字書取の習得状況が非常に悪かった児童 (下位 15%) 4 名のうちの 3 名は、課題①のポストで習得状況の悪かった 5 名のうち 3 名であった。(a)で下位 30%の成績であった児童は課題①のポストの得点が 70-85 の範囲にいた。一方、ポストテストでは良い成績 (90-) にもかかわらず、定着テストの (a) では成績が下位 30%にいる子どもが 2 名いた。

結果から漢字の宿題を一律で行うことは 3 つの点で課題がある。1) 習得済みの児童が 10%程度いること、2) 宿題によって効果が上がらない児童が 15%程度いること、3) 短期的には習得できているように見えても長期的に定着しない児童が 5%程度いることである。長期的な定着状況をモニターし、漢字学習を個別最適化する必要がある。